

朝鮮民主主義人民共和国における幼児音楽教育 ——文献・資料に基づく幼稚園教育の一考察——

斎藤 真¹⁾

Infant Music Education in D. P. R. K

SAITOH Shin

要 約

朝鮮民主主義人民共和国の幼児教育・初等教育についての日本国内の研究は非常に少ない。限られた研究者しか取り組むことができない韓国と環境は異なるにもかかわらず、非常に乏しい状況であり、ここに研究の意義がある。

共和国の特徴は幼稚園1年間を含む11か年にわたる無償義務教育である。首領と党への絶対的服従のなか、全体主義的な活動場面において幼児期から徹底的に共産主義建設の成員として扱われる。ゆえに、国家のねらいに沿う有能な人間を育てる一方で、自由な発想を持つ人間を育てることは難しいのではないか。

音楽活動では政治的指導者を誉め称える歌を通じながらも音楽的歌唱能力を培っている。西洋音楽にも通じる和音の聴取能力育成や、革命の象徴である赤い星を用いた子どもへの賞賛方法がとられるなど、政治と音楽教育がきわめて密接な関係であることが明らかとなった。うたと踊りを生活に位置づけ、相互の生活化を図る画期的な日課も設定されている。映像実況資料分析からは、党と指導者を賞賛する内容がほぼすべてを占める実態がわかった。民族楽器と西洋楽器の双方を一緒に用いることは国の方針であり、すでに幼児期音楽教育から行われていることが実証された。

今後はピアノやソルフェージュ指導について、テキストをもとに研究にあたりたい。

キーワード：朝鮮、音楽科教育、幼児、授業

1. はじめに

日本では、朝鮮民主主義人民共和国（以下、「共和国」と略）の教育、とりわけ幼児教育・初等教育についての先行研究は非常に少ない。朴尚得（1977、1979）の研究ぐらいである。

朴は『現代朝鮮教育の発展』において、金日成主席が発表した『社会主義教育に関するテーゼ』の背景について考察し、共産主義建設のための教育思想観に基づいた「社会主義教育の百科全書的な偉大な教育学説」と論じている。また、1972年にすでに実施されていた全般的11年制義務教育については「全民教育の具現であって他の国には見られない、共和

国における義務教育の先進的で人民的な内容」であり「前人未踏の高さを登り続けるであろう」と結論づけており、批判的な考察は見られない。もっとも、この70年代初めにおいて韓国では朴正熙大統領による独裁が行われており、現在のIT先進国として名を世界にとどろかせるような現在の位置にその姿はなく、むしろ共和国の工業が全盛期の時代であったのである。

朝鮮半島の教育に関する研究については1910年ごろより約35年にわたる、日本植民地時代のものは少なくないが、日本の敗戦に伴う朝鮮地域の独立、そして1948年の共和国創建以後、今日までの60年間にわたり一つの地域が南北に分断している状況の中、共和国についての日本人研究者の取り組みは非常に乏しい。その原因としては次のようなものがある

1) 中部大学現代教育学部幼児教育学科

げられよう。

- ① 日朝国交未樹立による人的、物的交流の少な
さによるもの、また、必要とされる情報が双
方ともに公開されていないことによるもの。
- ② 独裁国家のイメージからの嫌忌作用に伴う、
研究者自身の消極的姿勢によるもの。また、
周囲の研究環境支援の未整備によるもの。

梅根悟監修『朝鮮教育史』(1975)のはしがきにお
いては、執筆者代表でもある渡部学による次のくだ
りがある。「日本における、日本人の手による『朝鮮』
教育史研究は、残念ながら今日でもなお「闘争」と
でもいうべき色彩を完全に払拭し去ることができな
い状況」とし、そのたたかいの対象として「日本自
身の内なるステレオタイプ——これが偏見を生み出
す地盤なのだが——」と指摘している。また、「日本
植民地化の研究はほぼ論定されている」としながら
も「情報入手のアンバランスのもとでは南北に共通
する基本的な様相を統一的に論述することはきわめ
て困難」であり、結果的に南北にわけて研究するこ
とや、何よりもまず「断絶史観の克服」を命題とし
研究を進めていく中で新しい方法論を開拓すべきと
述べている。筆者はこの状況がほとんど変わってい
ないと考える。実際に日朝国交はいまだ樹立されて
おらず、また近年とみに、拉致問題を契機に乗じた
一部の勢力によって現在まで続く非友好キャンペ
ーンの遠因もあり、多くの日本人の共和国観が厳しい
ものであることは誰しも否定できないであろう。

元来は一つの半島、一つの民族である朝鮮半島に
ついての研究は、南北分け隔てずに行うことが好ま
しいが、南北各々が独立後、この60年の間に共和国
では親子二代の独裁体制のもとに独自の進化発展を
遂げてきたなかで、教育をどのような原理・思想の
もとで行ってきたのか。筆者は、故金日成主席や金
正日総書記個人崇拜ともいわれる同国の体制が、幼
児教育分野にも影響を及ぼしているのではないかと
いう仮説を持っている。資料の入手自体が難しいな
かで、できるだけ多くの資料からその実態を明らか
にし、そこに垣間見る成果と課題についても触れよ
うと考えた。本稿では幼児教育、特に幼稚園におけ
る音楽教育について述べる。

2. 共和国の幼稚園教育の変遷、法的位置づ けならびに活動科目

2-1. 日本植民地解放後からの幼稚園教育変遷

1946年に日本の小学校に当たる人民学校に1年
制の幼稚園を附設するように当時の政府である臨時
人民委員会が提示したのが始まりである。翌年には
教育令により「1年生用幼稚園教育機関」として位
置づけている。朝鮮半島が南北に分かれたのが
1945年、その後の1、2年で幼稚園教育をこのよう
に定着させたことはマルクスレーニン主義に基づい
た国の成長発展を夢見た社会主義教育理念の確固た
る意思と見ることができる。現在は中国との親密度
が報道でも明らかになっており、ロシアとの関係は
90年代から冷え込んでいる状態であるが、この頃の
共和国は、第2次世界大戦時の日本の敗北による朝
鮮半島の米ソの分割直後であり、ソ連の影響が相当
強いものであったと思われる。

現在の11年制義務教育制度は、幼稚園2か年の
うちの就学前1年間および4年制の人民学校、6年
制の高等学校に体系化され1975年に法採択され
た。なお2002年に人民学校は「小学校」へ、高等中
学校は「中学校」へと改称されている。幼稚園は2
年制であり、各学年は、朝鮮語を直訳したときの「低
い班」「高い班」という名称で呼ばれている。

2-2. 幼稚園の法的位置づけ

教育に関しては、まず1972年採択された『朝鮮民
主主義人民共和国社会主義憲法』において、以下の
ように規定している。

第3章 文化

第43条 国家は、社会主義教育学の原理を具現し、
次世代を社会と人民のために闘う高潔な革
命家に、知徳体を備えた共産主義的新人間
に育てる。

第45条 国家は、1年間の学校前義務教育を含め
た全般的11年制義務教育を、現代科学技
術発展の趨勢および社会主義建設の現実的
要求に則して高い水準で発展させる

第49条 国家は、学齢前児童を託児所および幼稚園において国家および社会の負担で育てる。

第5章 公民の基本権利および義務

第73条 公民は教育を受ける権利を有する(後略)。

第77条 女子は男子と同等の社会的地位および権利を有する。②国家は……多くの子を持つ母のために……託児所および幼稚園網の拡張、その他の施策を通じて母及び児童を特別に保護する。

これを受けて、さらに具体的に作られた法律が、幼稚園教育の基本となる、全6章からなる1976年の『子ども保育教養法』であり、幼稚園教育の基本的理念のみならず教員の職務や必要な物品まで規定されている。その理念としては「マルクス・レーニン主義をわが国の現実に創造的に適用した朝鮮労働党の偉大なチュチェ(主体)思想を唯一の指導思想」(第5条)とし「すべての子供を託児所及び幼稚園において国家及び社会負担で育てる」(第2条)こととしている。ここでいうチュチェ思想とは、共和国独自の指導思想であり、いわば革命的首領観に基づく国づくりの根本的土台となる指導原理である。この思想では次のような定義づけがなされている。

革命と建設の主人は人民大衆であり、革命と建設を推し進める力もまた人民大衆にある

革命と建設の主人公である人民大衆は必ず首領の指導を受けなければならない。首領は頭であり、党は胴体であり、人民大衆は手足と同じである。胴体と手足は頭が考えたとおりに動かねばならない。頭がないと生命は失われる。よって、首領の権威は絶対的であり全ての人民大衆は無条件に従わねばならない。

首領は金日成主席、党は朝鮮労働党を示す。1960年代後半の中ソ対立時に、同盟的關係ながらも大国相互の狭間に置かれていた共和国が、国の独自性をさまざまな方面で発揮できるようにとマルクスレー

ニン主義をもとに金日成が考えた思想であるとされている。「無条件に」と書かれているように首領や党への絶対服従を明らかにさせており、これが『子ども保育教養法』において規定されている以上、幼稚園教員にとっては、職務や物品一つについても全体主義的な活動で指導を受けなければならないことになり、教員個人としての自由裁量や事前指導なき実践は無に等しいことが推察される。では、子どもの立場についての記述はどうなっているか。

この法律では無償義務教育の根拠が記されている。「子ども」の概念として第1条で「共産主義建設の後備体であり、代を次いで革命する革命偉業の継承者」としている。この「代を次いで」は現在までも口号すなわちスローガンはじめ、生活のさまざまな場面において共和国では用いられ、教育だけでなく社会すべてが、共和国に住む人間を革命偉業の継承者として位置づけられていることから、成年でなくすでに子どもの時分より、徹底的に共産主義建設の成員としてその存在が規定されていることになり、良く言えば国家の思い通りで有能な人間を育てることになるが、逆の考え方としては、あまりに早期からの教育のため、自由な発想を持った人間を育てることが難しいのではないと思われる。

3. 音楽教育の実情

ここからは共和国の幼稚園における音楽教育の実際を諸資料からみることにしよう。

3-1. 学習科目からみた幼稚園での音楽活動

幼稚園では、集団生活の中で政治思想に対する基礎的教養と普遍的知識を教育することに重点がおかれており、具体的には集団主義精神と規律を重んじること、首領と党に対する忠誠心を核としている。そして、活動科目は全9科目からなり、週あたり時数順で

学習科目名	週当たり時数
1. 私たちのことば (※朝鮮語の学習)	3 時間
2. うたと踊り	3 時間
3. 数え方	2 時間
4. 描くこととつくること	2 時間
5. 体育	2 時間
6. あそび	2 時間
7. 観察	2 時間
8. 敬愛する首領金日成元帥さまのこども時代の話	1 時間
9. 偉大な領導者金正日元帥さまのこども時代の話	1 時間
週あたりの合計学習時間	18 時間

出典：北韓の幼稚園教育（パク・チェファン）p. 86 の表を整理したもの

この表からわかるように、ことばと音楽に関する事項が3時間ずつと多くの時間を占めているものの、やはり首領と党に対する絶対的服従心を教育する事項が設定されており、すなわち幼少時から徹底的に、金日成と金正日を敬慕する指導が授業として行われているのである。さらに幼稚園のみならず小学校においても各学年週に1時間ずつ設定されており、金正日の母親であった金正淑に関する科目も登場する。これゆえ、我々が報道で共和国国民のインタビュー時、よく耳にする「敬愛する首領さま」「親愛なる指導者」などのいわゆる枕詞とも解される言葉は「言わされているのではなく」「実は本心で自然的に発言している者もいるのではないか」と筆者は考えるようになった。小学校低学年でも、社会に対する疑問心などはなかなか表出しにくい時期であり、ましてや幼稚園年少時期から連日全体主義的活動のなかで、このようなカリキュラムのもとに教育を受ければ、自然観察活動中での疑問は生まれても、なかなか社会や暮らしに関しての疑問心は生まれないのではなかろうか。この問題点は共和国に限らず、特定の個人や偶像崇拜的なものに対し、殊更無条件に忠誠を誓わせたり、もしくは尊敬させるような教育を行っている幼稚園はじめ教育機関が十分取り扱いを考えて設定せねばならない事項のように思われる。

3-2. 学習科目「うたと踊り」について

学習科目「うたと踊り」については「北韓の幼稚園教育」に内容が書かれている。それを整理すると次のようになる。

学習科目名「歌と踊り」は大きく3つの区分からなり

(1)うた(2)踊りの基礎(3)日課踊(4)うたと踊りの4つからなる科目である。

この学び「歌と踊り」科目を100としたときの区分ごとの比率は各22～27%となり、科目名でみたときのバランスはとれているように思える。では学習区分のうち「うた」「日課踊」の内容をみてみよう。

「うた」の内容について

- ・金日成將軍のうた
- ・親愛なる指導者同志のうた
- ・わたしたちの国
- ・星ひとつわたし一つ
- ・学ぶ歌の練習

この「内容」で示されている事項は5つである。『金日成將軍のうた』は何よりもすべてに優先されるような歌曲であり、共和国から流される「チョソンの声放送」などの海外向け国際放送番組開始時の冒頭にも電子オルガンの単旋律により一節が流れるくらいの扱いの曲であり、国歌である『愛国歌』よりも朝鮮人民の中ではポピュラーな曲なのではないだろうか。

「親愛なる指導者」「星」とは金正日のことを指す。指導者や国と関連していない内容名は一番下にある「学ぶ歌の練習」しかない。厳密に言えば、そこで取りあげられるであろう歌は、恐らく上の題名に示されたようなものと似通っているであろうから、やはり『うた』の学びに関しても指導者を仰ぐ歌をうたうことによって「歌う」能力を育成していることがわかる。しかしただ指導者を仰ぐだけではなく、

音楽的歌唱能力育成も行っているところに音楽教育の要素が存在する。『金日成将軍のうた』では「不滅の革命頌歌 金日成将軍の歌詞 1 番を正確に発音し、読みかたや解説をして歌う」ことになっているのに対し『親愛なる指導者同志のうた』では「4 分の 4 拍子のリズムを正確に守り、丁寧に歌う」と拍節の学習を行い、その後の『わたしたちの国』では、4 分の 2 拍子、8 分・16 分音符、4 度の音程……と確実に学びの段階がやや急速にあがっている。宮塚 (2007) は「小学校の音楽教科書」(p. 172) の項で、入学したばかりの時に歌う『金日成将軍のうた』を取りあげ「多くのリズムパターンが使用され、同じフレーズの反復が少なく、正確に覚えるのが難しい。小学校一年生に歌わせるには、指導が困難と思われる」(p. 176) と疑問点を投げかけているが、小学校入学前の義務幼稚園 1 か年の学習ですでに上記内容が行われていることを鑑みたとき、彼が指摘する小学校における問題は容易にクリアできるものと推察する。また「高い二点ホ音があるが、特に声楽の訓練を受けていない一年生の児童を対象にした選曲としては難しすぎる」(p. 180) とも指摘しているが、筆者は以前、同国で年末行われる児童公演『ソルマジ=新年を迎える=公演』や日本の朝鮮学校での公演をラジオ放送やビデオテープを通して視聴したが、無理難題なく発声されているうえ、先述したように何よりも曲の置かれている立場が難易度よりも最上位であることから、この曲が設定されていることは明らかであろう。

「日課踊」の内容について

踊りに関する科目のうち、本稿では触れない「踊りの基礎」区分の学習は、朝鮮舞踊の基礎教育活動科目と思われる。「日課踊」は下に示す点でそれとはまったく異なるようである。

幼稚園生活における全体主義的集団行動を養うことを目的としているのではないと思われるものである。「日課踊」は具体的教育内容として以下のような事項が盛られている。

- ・教養室へ戻るときの踊り
- ・注意を集中させるときの踊り
- ・教養室を出るときの踊り
- ・昼寝前後の踊り

などであり、手足だけでなく頭や首など、からだ全体の動きを巧みに合わせながら、内容によっては教養員の弾くオルガンに合わせて全員一緒に踊ることにより、集団行動確立と音楽表現の技能を育成する働きがあるのではないと思われる。ゆえに、あえて「体育」の学習科目活動でなく、音楽関連である「うたと踊り」として設定されているのではないだろうか。以前共和国にいた人物へ筆者が行ったインタビューにおいても「別の教室から日ごろ生活する教室へ戻る際に踊りながら戻る」といった内容を聞くことができたが、音楽的な活動と体育的な活動を混合させることにより、相互の生活化を図ることができる画期的な学習科目であろうと考える。

3-3. 出版物からみた幼児音楽教育の実情

1. 専門誌論文・実践からみた幼児音楽教育

2003 年 8 月に平壤・教育新聞社から出版された「教養員」では、サリウォン（沙里院）教員大学の金グィスクが幼稚園年少班用の台本を提示している。ここでいう台本とは、記述内容から、日本における「学習活動案」に類するものに近い。まずは台本から見てみることにする。

〈強い音、弱い音がし〉

(低い班=年少班用 音楽あそび台本)

—目的—

子どもたちに強い音と弱い音を見分けられるようにする能力を育てる。

—準備物—

- 風琴（または手風琴、ハーモニカ）
- 太鼓、小鼓を描いた絵カード
- 赤い星板、赤い星数個

—あそびの組織—（筆者注：ここでいう「組織」とは準備することを示す）

子どもたちを 2 組に分け、半円形に座らせる。

—あそびの方法—

教養員はあそびの題目を告げる。〈強い音、弱い音がし〉（1～2 回続けて読む）

① 1 つ目のあそびの方法

教養員は《出席の歌》により、指名された2人の子どもは前へ出て子どもたちを向かわせる。

教養員は風琴（または手風琴、ハーモニカ）で強い音もしくは弱い音を演奏し、2人の子どもにどのような音であるかを答えさせる。

この時、子どもたちの答えは「強い音です」または「弱い音です」とし、まず正確に答えた子どもの組に赤い星をあげる。

②2つ目のあそびの方法

教養員の《出席の歌》によって、指名された2人の子どもが前へ出て、遊び場に向かう。（遊び場の上には太鼓、小鼓を描いた絵カードを置く）

教養員の風琴演奏音を聴き、子どもたちは強い音と弱い音を探し出し、それに合う絵カードを探してきて答える。

すなわち、強い音は太鼓の絵カードを、弱い音は小鼓の絵カードをあげて見せながら、太鼓の絵カードは強い音、小鼓の絵カードは弱い音である答えなければならないこととする。

この時、絵カードをまずとって正確に答えた子どもたちの組に赤い星をあげる。

このような方法ですべての絵カードを探しあげ答える形式を配合して行うことができる。

※留意する点

まず風琴演奏で和音で強い音と弱い音をさがし、和音でもその技能を変えて行うことがよい。（強弱記号が付与されたC-dur上でのIとVの三和音繰り返し演奏の楽譜が掲載されている）

このような楽器でだけすれば興味をそそることができないので、楽器を変えて行ったり、この時強い音と弱い音が規則的に変わって演奏する現象を避けなければならない。

そして、うたうことと踊ることを配合しながら遊びを進めればさらに効果的である。

—評価—

答えを正確にまず行い、赤い星を多く受けた組が勝ったことになる。

前ページの台本を考察して得られた特徴は以下のとおりである。

【教室環境】

・風琴（オルガン）、手風琴（アコーディオン）など、

ピアノ以外のものでなおかつ、鍵盤楽器により教育を行っていること。

- ・絵カードを用いる方法により、教材としての仲介物を通した学習指導が行われていること。
- ・恐らく教室には簡単なステージ的な場があるであろう。日ごろ生活する空間の中にも、ある種の「子どもたちにとっては特別な場」が設けられていると思われる。
- ・褒賞の対価として「赤い星」を授与している。幼稚園を紹介しているビデオにおいても赤い星を大きな板に個人別につけて賞賛するようすが映っていた。なお筆者が行った、以前共和国に住んでいた人へのインタビューでは、必ずしも「赤い星」とは限らず「赤い色のついたモノ」で代用していることも明らかになった。

【学習の進め方】

- ・「音には強い音や弱い音を表現できること」を実体験、すなわち遊びの活動を通して学べる方策がとられていること。強い音と弱い音の違いを認識させる具体的なテーマが設定されながらも、あくまでも遊びを中心とした学習活動になっている。すなわち「遊び」が子どもの学びの中心であることを示している。
- ・遊び（ゲーム）を進めていく中で、カードをたくさんとったところが勝つのではなく、あくまでも正確に答えられたものが勝つこと。わざわざ答え方として「～です」という言い方が示されている。すなわち、ただ絵カードをあげたり、楽器の名前を答えたり「強い音」というように答えるのではなく、「強い音です」と正しい言い方にして答えさせる点は興味深い。このあたりは日本の教育にもみられよう。
- ・さらに個人が褒賞の対象ではなく、遊びにおける「組」がその対象となること。このことに関しては後述する。

【指導上の留意点に関する記述】

- ・譜面を用いて具体的に「規則的な音の列による強弱」に陥らないような例を「留意点」として示していることについては、初発音を強く弾いたり次の音を弱く弾いたりしがちな傾向を予測してこの

ような留意がなされているのではないか。IとVの三和音の繰り返しが例示されていることは、いわゆる基本三和音の響きを何度も聴取することにより、その後の基本的な和声習得にもつなげられるような方策がとられているものと思われる。なおハーモニーの処理に関しては、金正日が1990年に発表した『歌劇芸術について』のなかで「できるだけ調和のとれた和音を用いながらも、それらが単調でなく、妙味がでるようにすべきです」と述べている。つまり専門家向けの教示においてこれらの事項を定義化していることから、いかに幼児期に「できるだけ調和のとれた和音」を徹底的に学ばせるかが、この活動一つにしても土台として位置づけられているかがわかる。

【学習の評価】

筆者が最もこの台本で注目した点は、この活動に対する教養員の評価方法である。C-durでの三和音鳴奏の強弱に関する規則的な繰り返しを避けるよう留意点をあげながらも、子どもの評価に関しては「答えを正確に行い（言い）、赤い星を多く受けた組」を評価するのである。

すなわち、この活動においてはあくまでも強い音と弱い音について「～です」という正しい言い方によって答え、かつ、個人がたくさんとったとしても集団として褒賞の対象となるわけである。この「集団の一員」として活動し「集団がほめられること」は、今でも日本の教育で行われているが、共和国の場合はその先にもっと深い問題が存在するのではないだろうか。組織活動がどのような場合においても優先されるなかで、個人には組織活動の一員としての責任が常に存在する。当然、ある程度の「個人の自由」は束縛されるであろう。活動一つから見ても、教育方針は明確であり、将来国益にかなう人材を育てるというねらいがわかる。この活動においては褒賞を「赤い星」の授与によって行っている。この点に関しては報道番組や国内向け子ども向け番組の視聴により、子どもに対する賞賛場面で「赤い星」を授与している事実がわかった。「赤い星」は大きな板や紙に掲示するのだが、個人ごと列化させた掲示となっており、褒賞の数の差が誰にでもわかるような方策がとられている。子ども向けのアニメ「チョ

りとオッキ」でも、善行に対する褒賞の対価として、教室の前において友人の拍手のなかで赤い星を授与している場面があり、その結果として子どもの赤い星数がさらに多くなった状況が描かれている。「よいことをして、赤い星をたくさんもらいましょう」というような（実際はそこを視聴者に考えさせるのだろう）結びで終わっている。筆者の調査では、必ずしも赤い星ではないことがわかっているが、赤い星は共和国では共産主義社会をめざす革命の星としての色とかたちである。そのうえでも、幼児期より、この色とかちをさまざまな場面で用いることは非常に重要な意味を持つ。筆者の小学生時代には、赤い星ではなかったがいろいろな色のシールを用いて、一覧表に個人ごとの学習の成績（できぐあい）や提出物について掲示する方法がとられていたことを想起する。この方法では、他人の状況もすぐわかり、それよりも少ない場合は確かに「自分もがんばらねば」という感情を持つこともあろう。ただしそれは一過性のものであり、特段、一生涯を左右するほどの意味はまず存在しない。そして、個人の優劣が簡単に特定できてしまう問題や極端な数値化、何よりも個人内評価が叫ばれる時代にこの方法はあまり良いとはいえない。ゆえに日本の大半の学校では導入されていないであろう。しかし2003年に出版、掲載されているこの資料によって、共和国では恐らく現在もこの方法がとられていることがわかった。個人として褒賞する場面がある一方で組全体の達成として褒賞する、双方の方法がとられている。大人の社会で言いかえれば、オリンピックで優勝した者に対して非常に大きな賞賛方法がとられている一方で、組織全体の達成・成果を要求したり責任を追及する、この国の「形」は実はこのような幼児期の一コマからすでに行われているのである。

3-4. 広報雑誌からみた幼児音楽教育

2008年6月に平壤・朝鮮画報社より出版された「朝鮮 6月号」には平壤凱旋幼稚園の紹介ページがある。全14枚中、音楽に関連しているものは1枚のみで「うたの勉強 とても好きだよ」というキャプションが記されている。男女3名の園児により、すべて機種が異なるキーボード伴奏に合わせて10名ほどの園児が歌をうたっている場面である。後ろ

には掲示板があり「赤い星板」のように見えるが、残念ながら星型までは分析できなかった。約35名ほどの列が並び、最も少ないシール数で2個、最も多い個数では11個と、とても平均的とはいえない赤いシールの並び方からして、間違いなく個人を評価する掲示物であろう。前述したように、以前共和国に居住していた方へのインタビューでは、必ずしも赤い星板とはいふものの必ずしも星ではなかったようであるが、いずれにしても赤色のシールにより、全体の中での個人評価を幼児でも判別可能な色と数による一覧という形式で掲示する方法は、かつて筆者が小学生時代のわが国のようすと似ている。

3-5. 録音刊行物からみた音楽教育

共和国では、すでに1970年代初頭には子どもたちの歌声が録音されたカセットテープやLPレコードを出版している。筆者も数種類所持しているが、すべて人民学校児童による歌や演奏のものであり、幼稚園ものはない。人民学校児童が放課後に通う『学生少年宮殿』でのものが多く出され、彼らは1980年ころに来日し公演も果たしている。先述のように、1975年9月の就学前教育1か年を含む11年制義務教育制度の法採択や、1977年9月金日成が教示した教育政策指針である『社会主義教育に関するテーゼ』の年代とも一致し、この事実からも、社会主義教育集大成としての発表舞台の場合は、当時は、いわば「後発の」幼児教育よりも、すでに義務化されていた初等教育段階に重きが置かれていたものであろうと推察する。

筆者の手もとには『幼稚園児による歌と演奏CD』がある。CDタイトルは、シリーズとして出版されている「朝鮮児童音楽 第1集」であり、サブタイトルは「全国幼稚園児たちの芸術総合公演実況」とあり、録音日時は1995年9月25日で同年、光明音楽社より出版されたものである。なお「光明」とは最近「光明星」と並んで、とみに用いられている言葉であり『北朝鮮・驚愕の教科書(宮塚、2007)』では「光明と称する会社や団体は、金正日の息のかかった組織と思って間違いない。金日成の太陽に対し、金正日は星である」と述べられており、幼児の音楽教育宣伝・普及に対する金正日の並々ならぬテコ入れの強さを感じる。このCDと同内容のビデオを日

本国内においても入手し、双方の視聴により内容細部の研究を進めた。

公演は全17プログラムであり、各題目はのとりである。地域・幼稚園名は中国黒竜江省朝鮮民族出版社「朝鮮・韓国行政区域地名便覧」を主に、筆者の推測を加えたものである。

1. 幼稚園児数人による開会あいさつと合唱
「これから幼稚園児たちの芸術総合公演を始めます」引き続き、
合唱「会ってみたい大元帥さま」
(平壤市西城区の幼稚園、両江道の恵山市の幼稚園)
2. 合唱「高くいただく 金正日将軍さま」
(平壤市西城区の幼稚園、両江道の恵山市の幼稚園)
3. 3名の園児によるうた「わたしたちは幸福童」
(南浦市千里馬製鋼連合企業所幼稚園、平安南道青南区的幼稚園)
4. 舞踊「愛の間食時間」
(金鍾泰電気機関車総合企業所幼稚園)
5. 男児重唱「遊戯曲」
(咸興市城川幼稚園)
6. 短篇のための民族器楽重奏「万景台は花園」
※万景台は金日成の生家がある
(平安北道球場郡の村幼稚園、沙里院紡績工場幼稚園)
7. 独舞「私もひよこを育てるよ」
(咸境北道清津市新岩幼稚園)
8. 男児独唱と小合唱「いつもともにいらっしゃるよ」(咸境北道清津市青松幼稚園児、黄海南道戴寧郡南山幼稚園)
9. 女兒独唱「いつもお変わらないですね」
(李ジョンソン同務が事業する幼稚園児)
10. 玉流琴独奏「祖国のふところ」
(平壤蒼光幼稚園児)
11. 伝説舞踊「鏡の岩」
(平壤鳳南幼稚園、咸境北道金策市の幼稚園)
12. サークス「3人造形」
(羅津一先鋒市 先鋒郡5月16日幼稚園)
13. ハーモニカ斉奏「革命歌謡連曲」
(金ミョンオク同務が事業する幼稚園)

14. 女児独唱「あすあさって わくわく」
(平安南道价川鉄道局价川幼稚園)
15. 舞踊「わたしたちも将軍様のちびっこ軍隊」
(平壤市中区慶上幼稚園)
16. 太鼓斉奏「豊年太鼓あそび」
(新義州市本部幼稚園)
17. 体育舞踊と合唱「金正日将軍様を高く戴こう」
(慈江道熙川市青年電機連合企業所豊山幼稚園、
江原道安辺郡 村幼稚園)

これらの題目列举のみから以下のことが判明した。

- (1) 政治的な内容が含まれているものがほとんどを占めること
- (2) うた、演奏、舞踊で構成されていること
- (3) さまざまな地方から出演しており、平壤市に偏っていないこと

まず(1)の政治的な内容についてであるが、歌詞や動きを細部まで分析すると、

- ・金日成をたたえる内容—1、6、8、9、
- ・金正日をたたえる内容—2、3、4、9、14、15、17
- ・社会主義生活をたたえる内容—3、4、7、10、16
- ・人民軍隊をたたえる内容—5、13、

以上のように分けることができ、一部の曲については重複している。政治的な内容が含まれていないとした7、11、12に共通することとしては、歌詞はないが、振り付けや動作などは韓国の舞踊には見られない朝鮮舞踊独自の動作であり、共和国独自の音楽・体育舞踊教育の産物と鑑みることができる。

次に(2)で示した、構成についての特徴のうち、音楽関連について述べる。

- ・歌唱は独唱3、重唱2、合唱が3である。男女それぞれの独唱のみならず、小合唱との混成も行われている。
- ・演奏については3種類の楽器演奏で、管楽器の短簫、弦楽器の玉流琴、打楽器の太鼓があるが、民族楽器であることに注目したい。

金正日は『歌劇芸術について』(1990)のなかで「民族楽器と洋楽器を組み合わせるべきである」と述べ、「われわれの音楽芸術を主体的な音楽芸術に発展さ

せるためには、民族音楽と民族楽器を基本に発展させながら、それに西洋音楽と洋楽器を服従させる原則を守らねばなりません。この原則から逸脱しては、わが国の音楽芸術を正しく発展させることができません」と言及しているが、金正日の教示が法規とはいかないまでも、実質、統制的な役割を持っていると仮定したとき、この『歌劇芸術について』という音楽専門家向けの論文に通じるものが、すでに幼児期の音楽教育において行われていると見ることもできよう。また、西洋音楽を民族音楽に服従させるという若干排他的ともいえる表現からは、民族楽器の優位性を主張しているようにもみえるが、あくまでも民族楽器と洋楽器の双方を適宜用いるという意味ではないだろうか。筆者はその根拠として、このCDすべての曲で用いられている楽器自体は、民族楽器よりも洋楽器が使われている点をあげたい。むしろわが国や韓国の音楽教育において、和楽器や韓国伝統楽器が幼児期音楽教育だけでなく初等教育段階で、どれだけ使われていることだろうか。この点については今後の研究課題としたい。

(3)についてである。共和国の憲法では首都を平壤としているが、出版・報道においては「革命の首都、平壤」とうたっている。また羅津—先鋒市(現、羅先市)と並ぶ直轄市である。それだけに、多くのプログラムに園児が出演しているのではないだろうかというのが筆者の考えであった。むしろ非常に少ない情報で出会う共和国の姿は平壤市のものばかりであり、地方については、悲惨な状況ばかり報道されることから推察してしまうことは無理もない。そしてこの公演が行われた1995年についていえば、平壤市の幼稚園出演が全プログラムの3分の1の多さで、やはり特別な地域なのではないかという見方も確かにできる。他方、地方単位である「道」の市・郡の幼稚園児も参加しており、まんべんなく各地方の企業所設置の幼稚園も含めて出演していることから『子は国の宝』の姿勢で全国一律に幼稚園の1か年をも無償義務教育に含む、国としての自負心としての姿も垣間見ることができる。興味深い点としては、9道2直轄市からなる共和国の行政地域において、ただ一つ、道自体が韓国と分断している江原道の幼稚園児が出演していないことである。単なる偶然であることなのか「計算された」ことなのかは現

時点ではわからないが、これだけの大きな舞台に参加できない理由が存在するのではないかと考える。今後の研究の課題の一つとしたいところである。

では、ほんとうに「普通の幼稚園児」たちが出演しているのであろうか。韓国教育開発院 (KEDI) の資料によれば、偶然にもこのプログラム上のうち3つの幼稚園について「北韓の代表的な幼稚園」の項目で次のように触れている。

- ・プログラム 10 番目の平壤蒼光幼稚園に関して「北韓の代表的な児童保育施設」であり「2000年6月に（韓国の）金大中大統領訪北時に夫人が訪問した」幼稚園
- ・プログラム 15 番目の平壤慶上幼稚園に関して「金日成主席が直接敷地を選定して設立された幼稚園」
- ・プログラム 16 番目の新義州本部幼稚園に関して「才能を持った子どもを探し、英才教育を行っていることで全国的に名をとどろかせている」「麺類やパンを生産することができる加工設備と 200㎡の温室を備えて子どもたちに食料を常に供給している」

我々が報道で目にする近年の子どもたちの状況とはかなり異なる。すでに 2000 年当時より貧しいようすが伝わってきていたが、大規模な施設や子どもを探してくるほどの英才教育実施、そして何よりも韓国の国家機関資料において「代表的な幼稚園」としていることから、やはり「特別な幼稚園」であって「ふつうの幼稚園」ではないものと筆者は考える。裏を返せば、このような特別な幼稚園でない、全国津々浦々、職場にも存在する幼稚園教育についての実態が資料等においても不明であり「すべての子どもに教育の機会均等を図る社会主義教育」との整合性についても検討する必要性を感じる。

4. まとめ

今回の研究で明らかになったことは、すでに幼児期の音楽教育から国家として有益な人材を育てようとする点である。そのため、遊びの活動を中心としながらも、音楽的な面ではかなり専門的な事項を幼児期のうちから設定している。それは単に歌唱活動

だけでなく舞踊や生活場面で行う踊りと組み合わせながら繰り返すことによって学びがつくられていることである。実際の場面では、個人や組ごとに競い合わせる方法が取り入れられている。また、ある種の「選ばれた子ども」の教育を行っている事実もわかった。さらに冒頭で提起した「金日成・金正日父子への個人崇拜体制が幼児教育においても影響しているのではないか」という点に関しても、資料をもとに実態を探り、幼児の生活すべてにおいて影響が存在していることがわかった。

1970 年代からのしっかりとした 11 か年義務教育制度は他国ではあまり見られないものであり、非常に有益なシステムであろうと考える。両親、特に女性が働くことができる環境が、この時代につくられていたことは学ぶべきこともかなり多いと考える。そのための施設として幼稚園が全国くまなく作られ、具体的なカリキュラムのもとに子どもたちが集団生活を送ることができることは、早期に学ぶことが将来に及ぼす影響としての長所からも非常に有効である。しかしながら前述のように、共和国では極端な個人崇拜がこの 50 年間で浸透しており、客観的、冷静的に物事をみつめる視点を子どもにもたせることはかなり難しいのではないかと考える。個人としての自由が残念ながらあまり存在しないのではないだろうかという疑問もわく。また、選ばれた子どもたちの存在はすなわち、幼児期からすでに優劣がはっきりしていることでもある。いわば 6 歳くらいの子どもの時代には、すでに人間としての一生がある程度決まってしまうことでもあり、その意味では非常に危険な面も存在するかもしれないだろう。

本稿では共和国や韓国からの資料をもとに考察した。幼児教育と初等教育が一つの線でつながっていることも明確になった。この事実からも今後は、共和国幼児音楽教育の実技教育、特にピアノやソルフェージュ指導について、学習テキストをもとに調査研究したいと考える。

【おもな参考資料・文献等】

※ 〈 〉 内は出版された国を示す
梅根悟監修、渡部学、広川淑子 (1975) 〈日本〉世界教育史大系 5 「朝鮮教育史」 pp. 314-332

- 金日成 (1977) 〈共和国〉外国文出版社「社会主義教育に關するテーゼ」
- 朴尚得 (1979) 〈日本〉朝鮮青年社「現代朝鮮教育の發展」外務省アジア局北東アジア課監修, 日本国際問題研究所 (1988) 〈日本〉「韓国=大韓民国 北朝鮮=朝鮮民主主義人民共和国」 pp. 165-6, pp. 190-8
- 金正日 (1990) 〈共和国〉外国文出版社「歌劇芸術について」 pp. 93-9
- 李ヨンファン (1993) 〈共和国〉「朝鮮教育史 5」社会科学出版社
- 朴ジェファン (2002) 〈韓国〉洋書院「北韓の幼稚園教育」 pp. 11-90, pp. 174-187
- 教員新聞社編集委員会 (2003) 〈共和国〉教員新聞社「教養員 主体 92 (2003) 年 第 2 号」 pp. 43-4, p. 52
- 教員新聞社編集委員会 (2003) 〈共和国〉教員新聞社「教養員 主体 92 (2003) 年 第 3 号」 p. 22
- 植田晃次 (2004) 〈日本〉国際開発研究フォーラム 26「朝鮮民主主義人民共和国における漢字教育——1990 年代を中心に——」 pp. 163-178
- 在日本朝鮮人権協会 朝鮮大学校朝鮮法研究会編 (2006) 〈日本〉日本加除出版「朝鮮民主主義人民共和国主要法令集」 pp. 1-14
- 宮塚利雄・宮塚寿美子 (2007) 〈日本〉文春新書「北朝鮮・驚愕の教科書」 p. 21, 172-204
- 朝鮮画報社 (2008) 〈共和国〉「画報朝鮮」2008 年 6 月号 p. 30
- 朝鮮 615 編集社「わが民族同士」内の記事 〈共和国〉 <http://www.uriminzokkiri.com/>
- 朝鮮コンピューターセンター「ネナラ」内の記事 〈共和国〉 <http://www.kcckp.net/ko/>
- 総聯映画製作所 〈日本〉 <http://www.elufa.net/>
- サイバー統一教育センター 〈韓国〉 <http://www.uniedu.go.kr/>
- 統一部北韓資料センター <http://unibook.unikorea.go.kr/new2/>
- ※なお本稿では、共和国で使われる朝鮮語のうち漢字派生語を可能な限り、あえて直訳することにより、意味がわかりやすくなるように努めた。

受付日 2008 年 9 月 30 日

受理日 2008 年 11 月 4 日

Abstract

There are only a small number of people in Japan who study about D. P. R. K = North Korea's child education and elementary-school education.

This number is unreasonably small enough, when we consider our research environment where only a limited number of qualified researchers are allowed to study South Korea, while it is not the same about North Korea.

Such scarcity itself could make this study meaningful.

One of the distinctive features of North Korea's education program is its compulsory education system provided tuition-free for a period of 11 years including 1-year kindergarten education.

As a part of the totalitarian state where people are strictly required to obey the Sovereign and Workers' Party, children are also treated as members to build up their communist society and are required to take part in various activities for that purpose.

Since their first aim is to develop capable people who can contribute to the nation's policies, I am afraid that it would be difficult for them to develop people who have liberal or flexible mind at the same time.

In the field of musical education, children are given opportunities to refine their singing skills, though it is through singing songs to admire political leaders.

The study has found that politics and musical education are connected very closely with each other: for example, it is encouraged to improve ability to listen to and identify various chords somewhat like Western musical education; the Red Stars (being the symbol of revolution) are used as scores to praise children.

On the other hand, there is an innovative education program where songs and dancing are assigned to children as a daily task and integrated into their everyday life.

As far as we have observed from video materials that captured actual situations, almost all of such songs and dancing are focused on admiring Workers' Party and political leaders.

It has proved that in North Korea both ethnic and Western musical instruments are used together, from the stages of child education, as a part of the nation's educational policies.

The next step of my study is to find out how piano and solfege lessons are conducted in this country, based on text materials.

[Keywords] north korea, corea, Music department education, infant